
忘れ物

りあめたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れ物

【著者名】

りあめたる

【Zコード】

Z43060

【あらすじ】

ちょっと（いや、かなり？）デジな高校生「亞季」が、冷蔵庫の裏側の世界で忘れ物を探す事態に。口を開かなければ普通にかついい魔道士と一年は一緒に過ごす悪い予感。これから先、どうなるの？

個性的な裏側の世界の住民たちに助けを求めるが、忘れ物は見つかるのか、・・・。

夏休みの宿題

「そこを何とかお願ひします。美紀様」

「様じやだめだなあ、亜季^{あき}」

「え、何気に私の名前は呼び捨て？」

「殿とか？じゃあ、神様、仏様、お代官様、お願ひします、美紀殿」電話で拝み倒している相手は、親友の美紀、もとい美紀様、いや今は美紀殿だ。

高校に入ってから、ずっと仲のよい親友で、スパンと竹を割ったような性格の持ち主。本人には言つてないが普通の男より男らしい。正面向いて、男らしいねなんて言つたらぶん殴られそุดから言わないけど。

「なんで、殿なのかなあ、、、普通に、『機嫌取りするなら、姫でしょう。相変わらず、亜季^{あき}つてば、ずれているんだから』

ため息がスピーカーから聞こえてくる。

お願いの仕方を間違えたらしい、じゃあ、姫といいなおすが、電話越しの親友はそつけない。

「大体、今から大量の宿題をこなすつてのが無理なのよ。あきらめなさい、開き直りなさい、そして先生に懺悔なさい」

美紀姫の声、冷たい。何年も前からの親友なのに、親身になつてくれないとは。

明後日の朝に学校に完成した宿題を持参して学校に行くには、あと明日丸一日しかないのだ。今日お願ひが完了すれば、明日の早朝から夜中までびっかり親友を拘束して、手伝つてもうつもり、だつて一日で一ヶ月少々の夏休みの宿題をこなすには一人では絶対に無理。

なんとしてもお願ひを受理してもらうのだ。

「全部できるなんて思つてないよ、けど数学の『鬼に金棒

近藤』

と、美術の『アルカイックスマイル安崎』^{あんざき}の分だけは、なんとか完成させたいの」

数学の担当の近藤先生は、普段はおつとりとしたやさしげな先生だが、数学の教科書をもたせたら鬼のように強い（計算が）ため、鬼に金棒と呼ばれている。普段が温和そうな表情をしているため、一年生のときなどは宿題を忘れました、「えへ」と笑つてすごせそんな雰囲気だと高を括つていたが、一学期のうちに思い知ることとなる。数学に対しては、まったく妥協をしてくれない先生なのだ。一回宿題を忘れれば、二倍の量に、次は三倍、と十日一割の悪徳貸し金業者も真っ青の金利が宿題についてくる。

そして、美術担当のアルカイックスマイル安崎は、数学の近藤とはまったく違う意味で怖い。仏像の笑みをアルカイックスマイルと呼ぶが、安崎がその笑みを浮かべるときは危険なのだ。口元をぴくぴくさせて、怒りを押し殺しながら長時間続く説教は、葬送曲並の眠気を誘う。寝れば、墓場に直行で、成績表に「1」という墓標が立つことは、有名だった。墓場に棒一本は、悲しすぎる、せめてアヒルをお供えしてもらいたい。アヒルとは成績表の数値の2の事だ、1は墓場に墓標の棒切れ、2はアヒル、3はパンの耳、と情けない呼称がついている。

「そういわれてもなあ。他にも提出はあるし。

思い出すけど、去年も私達ってこんな会話してなかつたっけ？」

親友の冷たい質問に、うつと亞季は声をつまらせた。

他人に指摘されるわけでもなく、毎年宿題をお願いするのは恒例行事となつているのかもしれない。

別に、わざと宿題をやらぬいでいるつもりではないのだ。長い休みだからとアルバイトをめいっぱいに組んで勤労に勤しむ結果、間に合わなくなつてしまつ。年末年始と夏休み（特にお盆）はパートの人も休みたいらしく、時給がわりといい。

「美紀はもう終わってるんでしょ？始業式の帰りに、駅前でランチとデザート」馳走するから

「ランチもデザートも魅力的だけど、無理なんだって」

「えー、じゃ、おみやの夜食菓子も追加するよ！」

「うわ、卑怯もの。だから、ほんと、無理だつて、私もあと数学が半分は残っているもん」

「え」

親友は助けになりそうになりました。

悪足掻き

「ああああ、どうする、どうなる私」
通話の切れた携帯を握り締めて、ベットの上でもだえてみたけど、
いいアイディアは浮かばない。

頼みのつなの親友はだめ、図書館閉まつてるし行つても間に合つ
ようには思えない、ネットでコピペしようにも、すごい人から引用
しようものなら、ばれるし、ローカルな本の感想文など載つてている
とは思えない。腦みそを搾り出してアイディアをいくつも出すが、
消去法をためせば、全滅してしまう。

他の頭のよさそうな友達は、自分でやりなよ派閥だし、例え答え
を写したとしても作文やら絵では丸わかりになつてしまつ。丸写し
してもばれなさそつな数学だが、学生の考えることなどお見通しら
しい。数学の鬼に金棒の近藤先生は、じ丁寧にも生徒一人ひとりに
見合つたレベルの問題集を渡してくださつたのだ。本当、小さな親
切大きなお世話である。ちなみに、私と同じ問題集を配られたのは、
クラスで美紀だけ。

熊のつよしくんみたいに、もだえる。

ニュースで見ていた、マレー熊のつよし君は、パートナーである
メスに餌をとられると、両手で自分の頭をかかえて悶えまくるとい
う、かなり情けない男らしさのかけらもないオスだが。あれはあれ
で、本人は幸せらしい、飼育担当のお兄さんが言つていた。でも、
今の私は悶えていても、少しも幸せじやない。

「ちょっと、うるさいわよ季。いい加減にしなさい」
下のリビングから母のあきれたような声が聞こえてきた。悶え方が
うるさかつたらしい。

「はい」

氣のない返事をして、足を踏み鳴らすのはやめた。

毎年、宿題をどうするかは恒例行事になつてゐるせいか、母親は手助けはしてくれない。小学生じやあるまいし、自分で計画くらい立てれるでしようと、色々と自由にさせてくれる有難い親なのだ。まさか、作文を手伝つてくださいなんて言えない。言つた次の日には、近所中に立ち話の話題の一つとして提供されて、知り合いのおばさま達から、生暖かい目線で応援されるのが落ちだ。恐ろしい。

『佐藤さんのお嬢さんの話、知つてる?』『ええ、知つてるわ。毎年夏休みの宿題を最後まで溜め込んでるんですつて。』『毎年だつたの?今年だけだと思っていたわ』『隣の窓から、宿題が間に合わないとうめき声が聞こえてくるのよん』『まあ、大変ねえ。おほほほほ。』『私の息子なんか、休みが始まると塾通いで時間がないからって、朝早くから毎日進めているのよ。』『すごいわねえ。』

『おばさんたちの、会話の幻聴が聞こえてきそうだ。数時間続く工ンドレスの会話は、近所の話と人の悪口でいっぱいなのだ。うつぶ。会話のネタにされるなんて、ごめんだ。何も話題がなくても、ひねくりだすのが得意技のご近所さんは、帰宅時間から出勤時間、誰のお給料が上がつただの下がつただの、あらゆるプライベートを網羅している。その記憶力を別のものに活用すれば、世の中のためになるだらうに。』

とりあえず、手助けが望めないのなら、残つた時間を計画的に配分して少しでも宿題を処理するしか方法はない。私も女だ、覚悟を決めなくては。

明け方までに空白だらけにしろ英語をこなして、明日の午前中で絵を一時間でこなして、呼んだこともない課題図書の作文を一時間で完成させて、数学を残りに費やして、・・・かなりきつそうだけど、いけるかもしね。

うん、と頷いて冷蔵庫にある、父の秘蔵ユンケルを取りにいった。

テスト前の詰め込みの度に、コンケル様にはお世話になつてゐる。
親父くさいと後ろ指されようが、知つたこつちやない、本当に効
くのだ。

キッチンに行つて冷蔵庫の扉を開けると、絶句して、驚きのあま
り声さえ出せなかつた。

我が家家の冷蔵庫の扉の向いには、すがすがしいほど青空の広がる
草原が広がつている。

冷蔵庫のつめたい冷氣ではなく、もつと気持ちいい空氣が私の頬
をなでる。鼻をつんと通る、青臭い植物の匂いと花の匂い。
扉を支える右手に力が入る。

(うそだよね)

自分が、変になつたのかなとぱちぱちと頬をたたいてみると、目
の前の景色は変わらなかつた。

小説に出てくるような、草原が広がつていて、遠くに山が見えて
いる。電柱や建物らしきものは、ひとつも見当たらぬ美しい景色。
信じられないけれども、確かに私の目の前に広がつてゐる。見え
るだけではなく、匂いや温度まで感じるなんてそんなリアルな夢は
見たことがない。信じられないけれども、信じるしかない現実が、
冷蔵庫の扉の中にあつた。

すゞく綺麗、写真でみた北海道みたいだ。

一度行って見たいと思っていた景色をもっと見たい。

吸い寄せられるようにして扉の中に一步踏み出ると、後ろでパ
タンと扉の閉まる音がした。

閉まつた扉

一步踏み出した足元は、大きな岩。ひんやりする足元だが、気持ちがいい程度の気温のせいか冷たすぎない。

「すゞい綺麗。嘘みたい」

亜季はつぶやいた。

田の前には、映画で見たりTVで放送されたような景色が見える。先ほど、冷蔵庫の扉を開けて見えた風景は、北海道のようだと思ったが、一歩入ったせいで視界が広がったせいか写真のような薄っぺらさがない。

右も左も見てみると、電柱も高圧線もない景色は本当に気持ちがよかつた。

足元を見ると、

「^{ふん}
糞だ」

扉をあけて踏み出したのが岩の上で本当によかつた。あともう一歩進んで岩から降りていたら、踏んでいたかもしれない。いや、踏んでいただろう、周りを見るのに夢中だつたから。薄い靴下一枚しかはいていない今の私が糞を直接踏んでしまうのは、痛すぎる。靴で踏んでしまったときだって、大惨事で、道路わきの段差にこすりつけながら歩いたりする。

踏まなくつてよかつたと心の底から安堵する。

自然なら、動物がした糞の一つや二つはあってもおかしくはないだろうけど、目の前にあるのはいただけない。

「踏まないでよかつたー。靴下一枚でウンチ踏むなんて、」「本當だよ、君がもう一歩踏み出していたら腕をつかもうかと思つていたんだ」

「『』親切にどうも。空氣もおいしいし、景色も素敵だから足元がおろそかだつたんだ。絶対危なかつたよ。黒ひげ危機一髪つて感じだね」

「黒ひげがなんだかは知らないけど、どういたしまして」

親切な人がいるらしい。親切な人が、・・・つて

「誰?！」

亜季は驚いて叫び声をあげるて、後ろを振り返つた。

振り返つた目には、鮮やかな金髪の苦笑を浮かべる人物がいる。目は信じられないほど色鮮やかなオレンジ。オレンジ色の目つて普通に見えているんだろうかと人事ながら心配になる。

「今更、誰とか聞かれても困るけど。普通、君の独り言に返事をした時点で気がつくべきなんだと思つよ。普通の人と視点が違うのは、いい点かもしけないけどね」

「よく言われます、トロイとか、思考が少しずれているとか」

初対面の人に自分の痛いところを突かれてしまった。

「とりあえず。初めてまして?私の名前は亜季です」「自己紹介するなら、名前からが一般的だうと名乗る。「すいぶん覚えやすい短い名前なんだね。通称なのかな?初めてまして、亜季。よろしくね。」

僕は、シコツツドルティン・ミラー。ミラーって呼ばれている。

君を迎えた魔道免許四級の、公認魔道士なんだ。詳しいことは後でいいかな。

とりあえず明るいうちに町に移動したいんだけど、君は鳥に乗れる？用意できた長距離用の手段が、鳥だったから暗くなると移動できないんだよね。ほんと、困っちゃうよ。町から外れているしさ、道のない場所だつたら、もっと便利なのが用意できたんだけど。

揺れるしや、僕だつて好きじやないけど、しじうがないよね」

自転車に乗れる？の気軽に調子で聞いてくる、ミラーと名乗った金髪とオレンジの派手な人物は、後ろにいる一羽の超巨大な鳥を指差した。嘴の部分に、馬でいう手綱のようなものがついていて、背中のほうに引き綱がまわっている。羽に隠れてみえにくいが、鞍のよつな椅子の一部がちらりと見える。

鳥つて、乗れるもんなんだろうか。

「パークートと、メリーパーランド、自転車なら楽勝ですが、鳥に乗る自信はまったくないんです。

乗り物に配慮してくれたミラーさんは悪いのですが、とりあえず一度は家に帰つてもいいですか？」

乗れるわけがない。亞季はぶんぶんと首を横に振つた。あんな超巨大な鳥に乗るなんてとんでもない。

「亞季の言う種類の乗り物は聞いたことがないなあ。

帰りたいって言つけど、扉なら一年に一度しか開かないから無理じゃないかな」

わざわざと恐ろしい発言をしたミラーに、亞季は呆然とした。扉。通つてきた冷蔵庫の扉が、ぐるっと見渡しても見当たらないのだ。

「ないない、ないない、扉がない――――」

絶叫する亞季こ、アーリーは頭をかかえた。

(「の子、色々と氣がつくのが遅すぎる、、、」)

（こんなんで、

一年の間何とかなるのかな）

初体験

「亞季、簡単ですよ」

目の前でうさんくさそうな紹介をうけた男、ミラーはこともなげに亞季に言つ。差し出した太い革紐を握れと言わんばかりに押し付けてきた。革紐の先には巨大な鳥がフォーヌがつながれている。動物園で見た、鶯やダチョウなんて目じゃない大きさで、胴体だけで車一台分はある。黄色く尖った爪は一本一本が筆箱ほどの大きさで恐ろしげだし目だって鋭い。

人間になつかせてあるし、元々穏やかな性格で攻撃はしてこないと説明はうけたが、いかんせん、サイズが大きすぎた。

「紐を持つのは簡単ですが、乗れません。無理です」

乗つたことなどないが、馬やラクダくらいなら乗り方自体は理解できるし、移動手段として車がない場所では便利だろうと想像がつく。だけど、鳥は無理、上下左右に不安定に揺すられて空中に放り出されるのがオチだ。パラシュートらしきリュックを渡してもらつていなかから、落ちてしまえば確実に地面と痛いキスをするはめになる。

「誰にでも初体験があるんです、ちょっと痛い経験もあるかもしれませんけど、大丈夫、僕についてこれば、こわくないよ」

「何ですか、怪しげな説得は」

目の前の自称魔道士は、他人が聞いたら誤解しそうな説得をしてくる。

「僕が先導を切れば後ろをついてくるだけだつて。僕が上手に誘導してあげるから、怖いのなら目をつむっていても終わつてるくらいだつて。あ、って思つたらおわつて、後はふわふわと気持ちいいく

らいだし

「人の話、聞いてます？」

初体験だの、上手に誘導だのエロすぎむ。分かつてて言つているんだろうか。

「君も大体頑固だねえ。乗らないと町まで行けないって僕は言つてるんだよ。

山の中で夜をすごすなんてゾッとする。鳥だから夜目が聞かないって何度も説明してるし、明るい内しか移動できないんだよ」

魔道士というのは、人の話を聞かないという職業なのだろうかと思う。四級と言つていたので、段階があるんだろう。一級は、少し強引。二級はマイペース。三級は、頑固。栄えあるミラーの属している四級は、まったく人の話を聞かないだ。勝手に決めてみる。マスタークラスになると、俺のものは俺のもの、皆のものは俺のもの、通称ジャイアンだ。

帰る方法がないと叫んだり、扉のあつた辺りを触つて探したり、呆然としたり、顔の色だつて白から赤から紫、土色と自在に変化させて（多分そんな感じ、自分の顔色だから見えてないけど）パニックになつていてる亜季に、説明するから一度町に戻ろうとしか言つてこないのだ。自分の都合一方で、亜季に対して特に配慮はしてくれないのが悲しい。

ミラーの言うことを素直に信じるのなら、一年後にしか元の世界に戻ることできないうらしい。詳しく述べ聞きたいのだが、日が落ちると移動ができなくて危険だから的一点張りだ。何が危険なんか聞いても、説明が長くなるから、乗つての一方通行に、亜季は小さくため息をついた。

「ミラーと一緒に乗りはできないの？」

乗るのはどうにも避けられないらしいが、一人乗りは無理だと妥協案を出した。

「フォーヌは無理、力がないんだ。一人も乗つたら重さで飛ぶことはできない。

僕だって、町の宿に荷物を置いてきて身一つで来ているだろ？ 人間一人なら乗せれるけど、一人になると滑空すらできるか怪しい。亞季が地面にぶつかることを怖がっているなら、別々に乗つたほうが安全なんだ」

「・・・・・」

「僕に置いていかれて、食事なし水なし山の中腹で放置されたいの？」

「・・・・乗ります」

恐怖はあるものの、放置よりはましだと亞季は押し付けられた手綱をとつた。

おしゃべりで人の話を聞かないミラーだが、親切に乗り方を教えてくれる。フォーヌの背中に取り付けられた椅子のような物にはベルトがついていて自分の腰と肩にガツチリと固定されることを知ると、亞季はほっとした。少なくとも空中に放り出される点はなさそうだ。

「じゃ行くよ

前のミラーの乗つたフォーヌがぐつと腰をかがめると両翼を広げる。数度羽ばたくとふわりと舞い上がるのに亞季のフォーヌもついて行こうと同じく腰をかがめた。恐怖で目を閉じると、頬をやわらかく風がなれる感触がして、飛んでいるのが分かる。

ジップトコースターのような気持ちの悪いフワフワとした感覚がないので、亞季はおそるおそる目を開いた。

「揺れない」

予想とはまったく違つていて驚いた。鳥のだから、さざね上下に

揺れるのだろうと思つていたが、地面を離れるために数度羽ばたいて上下したものの、すぐ翼を広げたまま気流に乗つて安定した飛行だ。

子供みたいに怖がつて馬鹿みたい。笑い出したいよつな気持ちになる。

本当に一年で戻れるのなら、誰も体験したことのないファンタジーの世界も悪くないかもしれない。

ファンタジー

15分も乗つていると、下に小さな集落のような建物が見えてくる。よく見ようと、亜季が身を乗り出そうとするが、フォーヌがくえええと可愛くない泣き声をたてた。座れといつていようだ。乗せている方だつて自分に比べて人間が小さいとはいえる空中では不安定になるだろうと、素直に重心を戻す。

先ほどまで自分がいたのは、山の中腹だつたようで、気流に乗りながらゆっくりと降りてくると風景も段々と変わるのが珍しい。きょうさきょの景色を眺めていりつちに集落から少し離れた場所に降りた。

「さつき上から広場が見えたけど、何で離れた場所に降りるの？」

亜季が聞くと、ミラーは親切に答えてくれる。

「上空から巨大な鳥が降りてきて」「らんよ、普通は驚くだろつ。騎獣は郊外に下りて町の中は引いて歩くが、背中に乗つて歩かせる程度なんだ。違反すれば警備兵から罰金を取られる」

ファンタジーの世界とはいえ、地球とルールはあまり変わらないようだと感心した。日本だつて街の中にヘリコプターを降ろしたり、車を暴走させたりはしない。

集落の入り口にある倉庫のよつた建物で二羽のフォーヌの手綱を渡して預けると、ミラーに素直について宿らしき建物に入った。

町につくまで説明をしてくれたが、きょりきょりしすぎると不審者だと思われる所以普通にしていて欲しいと言われて帽子のよつたものをすつぽり被せられている。中からは外が見えるが、外からはのぞけないという不思議な布地でできている。かぶっている方が不審者だよと亜季が言つと、大丈夫だと太鼓判を押された。日に焼けたくない女性が時々使うことがあるらしい。

「もう帽子を脱いでもいいよ」

ベットが一つに、いくつか家具の並んだかわいらしき部屋に入る
と、暗くなりつつある部屋のランプに火を入れながらミラーが教え
てくれる。

「宿についたら、説明してくれるってミラーは言ってたよね
色々と教えて欲しいことがあるのだ。私があの場にいて当然とい
う態度だったし、移動に自分の分だけではなく、もう一人分用意し
ていたという事は、知っているのだ。岩の上に一人の人間が現れる
事を。

「うん」

返事をしながら、宿の受付で渡してもらつたバックから小さな本
を取り出した。

「夕食は部屋に運んでもらうから、食事までは僕が説明するよ。食
後に本を読むといい、昔のソーターが書いたものだから、亜季が知
りたいと思う内容が分かると思う
「ソーター？」

聞きなれない言葉に亜季は首をかしげた。

「異世界からきて、こちらで『忘れ物』を探す役目のものをソータ
ーと言うんだ。

国に12箇所、君が乗っていたような岩があつて、出現場所は毎回
違うが、毎年一人が召還されている。

一年間、忘れ物を搜索したら、成功・不成功にかかわらず王宮か
ら元の世界に送り返してもらうことができる
「帰れるんだよね？ 確実に」

恐る恐る聞くが、ミラーは大丈夫だとうなづいた。

「君は神隠しとか行方不明って聞いたことがない？」

「ニュースではあるけど」

「君が来た世界では、広い場所でたくさんの人人が住んでいると聞い

ているよ。結構な人数が行方不明になっているはずだ、行方不明になる人物のうち年一人が、ソーターという訳。

ソーターになるのは、幾つか条件があるみたいだけね、よくは分かつてはいない

「珍しいの？」

「珍しいは珍しいね、でも毎年一人が来ているから恒例行事のようになつていてるかな。大昔は、不思議な現象だと研究していたけど、今だに理由は分からないんだ」

トントン。扉がノックされると廊下から夕食ですと声がする。
「食事だ。後は自分で読んでみて」

夕食

ガラガラとカートに乗せられた蓋がついた鍋と、籠に盛つてあるパンのような丸いものを部屋に入れると、おやすみなさいと言いながら宿の人は部屋から出でていった。私達は今から夕食だつていうのに、おやすみは早すぎるような気がするのだけど、習慣なのかもしれない。

「うわ、おいしそう」

亞季は早速、鍋の蓋を開ける。中には野菜がいくつも入っている具沢山スープが入つていて。思い起こせば、夕食を食べずに親友に電話した事もあり、かなりの時間食事をとつていなかつた。美味しい匂いにお腹がグーとなりそうになる。

部屋にある小さなテーブルに盛り付けた後、早速食べ始める。ミラーは始終無言で、時々目をこすりながらだつたから、眠いのだろうと思つた。食事までは質問は受けるけど、後は本を読んでだつたし、親切に聞いたことは答えてくれるのだから、質問に答えたくはないという訳でもなさそうだ。

色々な野菜と少しの肉が煮込まれたスープは、シンプルな味付けながら美味しくて、海外で食事が口に合わなくて困るということはなさそうだ。パンもどきは、驚いたことに木の実らしい。ちぎつて食べると小麦の風味がするのに不思議だが、どの家の庭にも植える一般的なものだと聞いて納得する。来る途中、あちこちに、りんごくらいのサイズの実がぶら下がつて木を見たからだ。

「良かつた美味しくつて。一年過ごすにしても、ご飯がまずいなどうしようもないから」

「うん」

「ソーターって何するのか分からぬいけど、しなくてもいいものなの？」

「うん」

「忘れ物つていうのを探すんでしょう？」

「うーん」

「スープに入ってる肉つて、おいしいからいいけど、どんな動物？」

「ごめん、眠くて我慢できない。明日にして」

もぐもぐと食べながら生返事と欠伸を繰り返すミラーは、部屋の明かりもそのままにベットにもぐりこんでしまった。テープルには半分ほど夕食が残っているし、洋服も着替えせずにそのままだ。もちろんお風呂にも入っていない。

「早っ」

少し暗くなっていた程度から、完全に口が落ちて30分も経っていないのに、就寝なんて、信じられない。迎えに来るのに移動をしているだろうし、無理をして疲れていたんだろうか。

一人で、食事を食べるとカートを廊下に出しておく。あまり長くない廊下だが、左右に扉がついていて、別室の前にも同じようにカートが出してあつたので同じようにする。他に宿泊客がいるのに、シーンとした廊下が少し怖い。

「もう寝ちゃったの？ミラー起きてる？」

独り言を言いながら、覗き込むと、横向きになつた金髪が顔にかかるているミラーは熟睡しているのかピクリとも動かない。自分にイッパイイッパイだったので、ミラーの事は金髪とオレンジの目という色ばかり気になつていたが、結構美男子だ。少し一方通行ぎみな性格だけど、悪い人物ではないし、何より知らない世界でお金を一円も持っていない身分としては、頼るしかない。

先はどうなるんだろう。

ぽんやり考えてみても今はできない気がする。

まさか、夜に一人で出歩くわけにもいかないので、先ほどもうつた本を明かりの下で読み始めた。

日記のように書かれていて、最初の数日は混乱している様子が文章から見て取れる。日常生活の違いについて書かれているのが殆どだ。

早乙女と書かれた本の最初の持ち主は、亜季と同じように魔道士が迎えにきたと書いてあつた。筆まめな人らしく、日常のこまごました事が丁寧に書かれている。

忘れ物と呼ばれる何かを探すのが役目と聞かされたと書かれている箇所には、この異世界に来た理由が分かつてほつとしたと書かれている反面、どうやって探せばいいのか分からないと混乱もしている。

ペラペラと読み進めていくうちに、亜季の頬が赤くなってきた。我慢できずに本を閉じる。

な、な、なにこれ！！

ソーターという役割について書かれているのは、数日分しかなかった、逆に、早乙女という女性が同行している魔道士に片思いをしている文章が増えてくる。

彼が笑ってくれたとか、手をつないだとか、ページがすすむにつれ好きという言葉が多くなつてくる。うわあああああ、と夜中でなければ、叫びたくなるような恥ずかしい文章になってきて、亜季は机に突つ伏した。

本の続きを読む気にはなれない。この異世界について前駆者の書いた文章を読めば、多少は理解できるだらうと思つていいたけれど、人のプライバシーだけの日記だなんて思つていなかつたからだ。ミラーは内容を知つていて私に渡したんだろうか、だとしたら人が悪すぎる。明日、日が覚めたら聞いただす気が満々だつた。知つてゐよとしらりと言つたら、一発くらいお見舞いしてもいいだらう。

書かれた文章の日付が2日目を過ぎた箇所から、魔道士がかっこいいとか、やさしくしてくれたとか、？と思う箇所があつた。混乱していく、孤立している人間は、誘拐者ですら一緒にいる恋愛を抱くらしい、いわゆる「つりばし効果」という心理現象だ。

不安な状況で、保護してくれそうな人物と一緒に行動をすれば、異性ならば恋愛に陥りやすい。知識として知つていたので納得はできた。

日記は、一週間目からは、転びそうな手を引っ張つてくれて、抱きしめられて息が止まりそうなほど驚いたとか、恋愛バリバリの文章だったのだ。キスをされて、足から力が抜けたのはなぜだろうと、いつ箇所で、夜中でなければ叫びだすところだつた。こつぱずかしくつて。

恋愛小説ぐらい平氣で読むし、別に男女がどうこうするのは分かつてゐる。男の人の読む一方的な性の雑誌があるのも知つてゐるし、女の子だって、かなりリアルな本も読むのだ。恋愛について、何もしないよなんて言い切るつもりもないけど、個人的な日記については別だ。

続きがどうなるのか、気にはなるけど、呼んでしまえば覗き見を

していふよつて嫌だ。まあ、さうと、なるよつになつたんだよつと思つ。

肝心のソーターについてなんて、一行も書かれてはいない。

途中までしか読んでいないけれど、日記の持ち主の早乙女という人物は、同行している魔道士について一色の文章だったのでも、忘れ物は見つけれなかつたんだろう。きっとそうだ。

本はそのままテーブルに置くと、ベットで眠るリリバーをちらつと見た。

つりばし効果、つりばし効果。不安な状況にあると、身近な異性を魅力的だと思つてしまつのだ、私はだまされないぞ、呪文のように言い聞かせる。

異世界からきた見ず知らずの人間が同室だといつのに、不審には思はないのだろうか、この男は。

荷物を盗んで、財布をとつて逃亡、「、」すれば、元の世界に戻れなくなつてしまつので、盗みをされる心配はないつてことなんだろつか。それとも、人を疑うことのない性格なんだろつか。

何も考えずに、すーすー寝息をたてる金髪の魔道士がうらやましい。

「とりあえず寝るしかないか」

明かりの消し方など分からぬ。中身のオイルが無くなれば勝手に消えるだらうから、そのままにしておくことにした。消してしまつて、真つ暗になつても怖いといつのもある。

「おやすみなさい」

返事がない相手に寝る前の挨拶をして。亞季は目を閉じた。

一〇三

朝、起きてトイレの扉を開けて何も考えなく入って扉を閉めたら、全く知らない場所にいた。

そばには、一人、金髪の男性が立つていて、混乱する私を落ち着かせようと何か食べ物らしきカラフルな包みを差し出してくれる。怖くて手を払うと、悲しそうな顔をされた。

泣き出す私に、もとの世界に帰れるのだと金髪の男性は言つが、一年後になるという。我慢できずに、また泣き出ると、夜になると危ないから移動しようといつて手を差し出してくる。

また、さつきみたいに手を払つたら悲しそうな顔をしそうなので、従つたけど、怖くて不安でしあうがない。

部屋についたら、この本をくれた。本のよつな丁寧な装丁だが、手帳のようなものらしい。つらることは日記を書くとすつきりするんだと言われて納得する。

日が落ちると同時に、男は眠つてしまつた。私は明かりの下で、一日の日記を書いている。早く一年が過ぎるといい。本当に帰れるんだらうつか。

一〇四

眠りながら泣いていたらしい。目がはれぼつたいのを見て、かつこいい金髪の男性はねれタオルを用意してくれた。私が起きたのは男が目が覚めてから随分後らしく、部屋に朝食の用意が済ませてある。男と一緒に食事をとつた。彼の名前はショットドルティン・エリアリエス。年に一度異世界からの客人を迎えて来た公認魔道士だと自己紹介を受ける。魔法? さすがは、違う世界だ。

エリアリエスは、きちんとした自己紹介をしてくれた。昨日は手を振り払つて申し訳なかつたと言うと、笑つて許してくれた。よかつた。笑うと子供みたいにかわいい人だなと思う。

色々と怖いし、どうすればいいのか分からぬけど、今は大丈夫そうだと思う。がんばろう。毎年誰かが来ては帰つてていると聞いたので安心した。

三田四

王都に移動中。毎年来る異世界からの客人に任命される事があるので、王に会いに行くとアリエスは言つていた。首の長い変な動物に乗るように言われる。出来ないと後ろに下がつて怖がると、自分が触つてみせて怖くないと証明してから、私の手を握つて優しく触らせてくれる。ふさふさした毛の生き物で、触れると暖かかつたけど、なぜか私の顔が真つ赤になつた。子供みたいに、怖がつたのが恥ずかしかつたせいだと思う。光にエリアリエスの金髪がすけてみると綺麗でうらやましい。私が黒髪じやなかつたらいいのに。

四日目

エリアリエスと呼びにくいいなあと呟いたのが聞こえたらしい、アリエスと親しい人には呼ばれてるからと教えてくれた。

まだ移動中。お尻りが痛くなつてきた。昼食の時に言うと、アリエスは分かりましたと言つてくれる。座布団を期待していたのに、午後に移動する時には、なぜか彼の膝の上に乗る事になつた。すごく恥ずかしいのに、うれしいのはなんでだろう。

夜、日が落ちると同時に眠つてるアリエスの鼻をつまんで復讐する。すつきりした。

五日目

明日には到着すると教えてもらひ。おしりの痛みはよくなつたけど、恥ずかしくてしようがない。カーテンみたいな帽子をずっとかぶつているので見られないで本当によかつた。

一日目はたくさん不安で怖かつたけど、アリエスが説明してくれるこの世界が興味深くて楽しい。一年過じるのはできそうだと思う。休憩のとき、騎獣から降りるときにふらついて倒れそうになつたらアリエスが抱きしめてくれた。細いのに、力があるのに驚く。女性みたいに美人なのに、男性なんだと自覚する。本当に驚いた。

六日目

すごい人でいっぱいの王都につぐ。王様に謁見出来る時間帯は午前中のみなので、明日会つ事になつた。午後時間があるので買い物をすることになる。やつと着替えを買ってほつとして店を出たら、店の外で待つ正在してくれたアリエスが差し出してくれたのは、色とりどりのお菓子。

見た覚えがあるなと思つて、ありがとうと言つて受け取ると、私とであつた時に渡そうとしていたものだと気がつく。どんな女性が異世界から來るのか楽しみで、王都で買つたんだと聞いて胸がどきどきした。どうしよう。明日、王宮に行くのは緊張してどきどきするけど、それとは違う気がする。気もそぞろで転びそうになつてアリエスに抱きしめて助けてもらつた。

七日目

王宮は美しく、たくさんの廊下と部屋を通つてくらくらした。迷いそうだと言つたら、笑われてしまつ。王は威厳のある老人だが、目が優しそうでいい人だつた。

私は、ソーターと呼ばれる存在で、一年間忘れ物を搜すのが役目だと教えられる。何かを見つけるのが仕事らしい。何かというのは、

異世界から来た人間にしか発見できないから、うまく説明できないと言われた。

一年に必要な経費、その他護衛もつけてもらひ。

帰りの保障もされているし、役目があつてこの世界に来たんだと思つとほつとした。過去では忘れ物を見つけた人物の方が断然少ないらしい。見つからなくても大丈夫だと言われた、お菓子や洋服の技術、色々な知識が伝わつて発展したりして、異世界から人が来ることは国にとつて利益なのだと教えてもらえる。

八日目

アリエスを怒らせたのだろうか？ 昨日とは違つて、いろいろしているように見える。

昨日決まつた護衛のエラが苦笑していた。エラは分厚い皮の防具を着ている大男だ。背は高いし筋肉がすごいけど、目がたれ目で優しそう。炎のように真っ赤な髪の毛の持ち主だ。本当にカラフルな人が多すぎる。色鉛筆みたい。あまりにすごい色なので、何度もまじまじと見つめてしまう。エラがアリエスが険悪になるから、珍しい色だからってまじまじと見ないでくれと耳打ちしてきた。なぜ？

今日からアリエスとエラと私の三人で、國中を旅する。旅とはいつても、気になつた町に滞在でもいいらしく。一週間ほど王都を探検してからにしようと決定。

城下を一望できる展望台を見に行つた。エラはなぜか登らないで出入り口を見張つていると言い張る。いい景色らしいのに、なぜだろ？ かと思つたけど、階段がたくさんで疲れるからなんだろうと分かった。ぐるぐる登つてやつとアリエスと到着する。

やつと「入り口だね」と言つてアリエスに抱き寄せられて、口付けを、、つて日記に書くのも恥ずかしいけど、口付けされると足に力が入らなくなるのは何故だろう。私のことを好きつて言つて、うつきやああ、書けない。この日記、誰も読めないよね？ 日本語な

んだもん。私も、アリエスが好きだと伝えた。

「おはようござれ」

まだ眠いのに、起こすなんて誰だらけ。お母さんじやなむうだし。反対側にもぐもぐと動いた。

「出発する時間になるんで、起きてください」

田覚まし、壊れたのかなあ。電池きれてたっけ、ってか誰の声だろう。男性の声のような気がする。気のせいだろつけど。

悲しいかな、おはようホールをしてくれる彼氏もいない。とすると、声が聞こえるのは夢のせになんだらけ、お布団が気持ちいいなあ、あつたかい。昨日、お母さんが干しておいてくれたんだろう、太陽のようなおいがして、ふわふわだ。枕も、いつもの自分のじやないみたいにやわらかい。気持ちよすぎる。

「全くもひ、日がのぼる時間どいつもじやないですよ。信じられない。大体、年頃の女性だつていうのに、男と同室で熟睡するし、あ、母さんも昔ねうだつたな。女性つて、変なところで鈍感なところがあるから。

「朝ですよ、いや、このままでは、もつすぐ匂ですよ。
おーおーてーくーだーおー。起きて。おさるんだ。起きる時です。おさるおおお×

がつさがつさと体中をゆすぶられて、私も田が覚めた。

「起きる」の新しい五段活用の効果は抜群だった。ぱちっと田がさめた私の田の前には、まぶしいばかりの朝日の透ける金髪と、ビアップのオレンジの瞳。

「ハハハやあああ、誰！？」

寝起きに美少年はきつい。

「誰とか聞かれても、昨日血几紹介はしましたが。もう一度いりますか？」

起きて、着替えして、顔洗つてください。朝食のプレートを食堂に取りにいってきます。

全部すむまで鍵はかけといへださい。着替え中にはちあわせなんて困るだらうし」

「はい」

「気持ちよく眠れたみたいでよかつた。

恐怖で泣きつかれて眠れないなんて事態じやないのはいいけどね」「はい」

なんか、それってけなされている？ ハリーは案外ちょっとぴり腹黒かもしねれない。

扉を開けて「もう田が覚めてるよね」と確認しながら苦笑を浮かべる男に、裏があるような気がしてきた。昨日の出来事を思い出しても季は真っ赤になつた。

なんていうか、はずかしすぎる。小声で返事をすると、もぞもぞと起きた。

枕元にある用意されたワンピースのような服は横にスリットの入つていてアオザイを彷彿とせるデザインで動きやすい。下はゆつたりとした紐で締めるズボンのよつたものをはく。

かわいいかも。

着替え終わつてみると、洋服には裾や襟などのそこかしこに小さな花の刺繡が入つていたり、ズボンのよつたものもレースがあしらわれていてかわいらしい。とびゅうしもないドレスではなくてほつとした。

部屋に用意されている洗面器に張られた水で顔を洗うと、鏡には不安そうな自分がうつっていた。

「しつかりしる型季。一年で戻れるって話だし、とりあえず怪我もないし生きてるし大丈夫そんなんだから。逆に楽しまなきゃ遙自分に言い聞かせる。

とんとん

控えめなノックの音にあわてて扉を開けると、おいしそうな匂いのするプレートを一つもったミラーがいた。

「食べてくださいね、日記読みました？多分書いてると思つから説明は省きますけど、ソーターは王と面会するんです。聞きたいことあつたら、移動しながらにしてください、寝坊したんで予定より遅くなっちゃいそうなんです。今日から王都まで移動しなくちゃいけないので体力つけてくださいね」

「あー、日記ね、ヽヽヽ」

「異界語なんで僕には読めませんけど、日記って行動予定表みたいなものだつて聞きました」

ミラー、君は誤解してるよ。

私はがつくりと肩をおとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4306o/>

忘れ物

2011年4月12日21時55分発行